北京の國都的性格

——歴史上よりみたる——

田村實造

北京が、はじめて正式な國都として擇ばれたのは、女眞族によつて建國された金の代、詳しくいへば、その第四代海陵王の貞元元年（皇紀一八一三）のことである。①

爾來、元・明・清と引きつゞいて、最近民國十七年國民政府が南京に遷都するまで約八百年——もつともその間、金末と明初に合せて八十年ばかり、前者は汴京に、後者は南京に都を遷したことがあるので、それを除けば約七百年間——の長い年月に亙り、支那における國都としての輝かしい地位を保ちつゞけたのであつた。②

ところで、この北京の地理的位置をみると一見しても判るやうに、支那本土を統治すべき中央政府の所在地としては、それ以前の國都たりし長安（陝西省西安）や洛陽（河南省河南）あるひは汴京（河南省開封）などが、ほゞ中央部に位してゐるのに比して、あまりにも北東に偏在しすぎてゐる。

さらにまた、從來しばしばいはれるやうに、支那は歴史上よりみれば、文化的・經濟的その他においても北方から次第に南方へと發展し開發されてゐる。③殊に南宋以後になると江南は支那文化の淵藪となり、經濟上からいつても、いはゆる江蘇みのつて天下足るとの諺が示すやうに、江南地方がほとんど北支いな全支那を賄つてゐて、北京へはこの江南地方から大運河や時に海運によつて糧米を運ぶといふ非常な不便——單に糧食だけからいへば、すでに隋や唐の頃にも常にこれを江浙地方に仰いではゐるが、元・明・清となると量的にみても、この傾

向は一層甚しくなつてきてゐる――を經驗してゐる。

かやうに、文化の點や經濟上からみても、南宋以後になると支那の重心は、あきらかに中原以南に移つてゐると思はれるにもかゝはらず、なぜ北京は、かくも長い年月の間國都たりえたのであらうか。

かゝる疑問を解くためには、支那民族と北方ないし東北方民族との關係といふ立場から、國都としての北京がもつ歴史性を考察する要があり、北京の國都的性格を規定する要素も、この點に存するかに考へられる。

一體北京を國都とした諸朝をみると、うち明を除く三朝までが北方民族に出自してゐる。すなはち金朝を興した女眞族にしても、元朝を創めた蒙古族、また清朝を建てた滿洲族にしても、その生活態樣は嚴密にはそれ〴〵多少の相違はあるにせよ、ひとしく北方民族であるといふ點において、定著農耕の支那民族とは本質的に異るものがあるといへよう。そのかれらが金・元・清などの國家を建設することによつて、それまで遊牧的ないし半耕牧的民族のみを支配の對象としてゐたことから、さらに進んで本格的に支那本土を領有し、支那民族を直接統治するとなると、在來の如く北方に在つて號令することは、全ゆる點において不自由不可能となり、その結果自らが支那本土に政治的本據を置かざるをえなくなる。つまりかれらの北京遷都は、かゝる歴史的命題による必然性に基くものである。

しかし半面、かれらにとつて、その勢力の補給源ともいふべき滿洲や蒙古を、あくまで自らの手中に堅く把持して置くことは、かれらが支那民族に對する主權を强固ならしめる上に絶對的に必要である。北方自體より遊離した北族國家の支那統治こそは、到底永續すべくもなく、逆に、かれらが故土たる北地を、しつかりと勢力下に置いて支那本土に臨むかぎり、その覇權は强固にして安全である。

北京は、この北方と支那、北方民族と支那民族とを聯ね、兩者の相互關係を充足せしむべき位置にあるわけであり、北京が國都として荷負する歴史性は、まさにこの點にあるといへよう。同時にこれはまた北京がもつ一の

基本的性格でもある。

以下、上述した如き立場を、歴史的事實の上に求めて考察してみたい。

まづ金についていへば、新に領有するに至つた淮水以北の北支那の土地と人民とを統治する大方針から、第三代熙宗の頃より多數の女眞族を新領土に遷徒せしめ、つぎの海陵王になると、遂に國都を北京に遷し――もつとも海陵王の燕京遷都は、單に支那統治の便宜上からのみでなく、國内における政治的社會的理由も見逃しえないことは、すでに本學文學部出刊、紀元二千六百年記念史學論文集のうちに收めた拙稿、金の海陵王燕京遷都の一考察において述べておいた――こゝに北京は、はじめて一國の首都たりえたのであるが、しかし、もと〳〵女眞族の本地は滿洲にして、ここが國家的勢力の基地であり、且つ當時なほ興安嶺の東西地區から長城地帶にかけては、國こそ滅びたれ契丹族が相當な潜在的勢力を保有し、これらは遙か西方中央アジアに國する西遼王國(カラキタイ)と互に氣脈を通じてゐて、すくなくとも滿洲・蒙古を確保しないかぎり、北支那の統治も保しがたい。從つて、金がたとひ北京に奠都しても、この至上原則ともいふべき北方の本地に力の重點を置くことを怠るならば、國家が滅亡するか或は主權者自らの破滅となるか、いづれかである。

一旦北京に落ちついたかにみえた海陵王が、やがて支那文化にかぶれ、騎虎の勢のまゝに、さらに南の汴京開封に都を遷し、北方を忘れて南宋の征服に全力を傾けんとするや、遼陽を中心とする女眞及び渤海的勢力に擁護されつゝ蹶起した世宗④のために、忽ち打倒されてしまつたのは、如上の見地からすれば當然の歸結である。

世宗は再び北京に都を復したが、かれの行つた政治の要諦は、熙宗・海陵王以來の華化政策によつて萎微・沈滯しつゝあつた女眞的勢力を、物・心の兩面において振起し、もつて政治上・經濟上・文化上その他からも支那的勢力との均衡・調和を圖るにあつたと思はれる。しかし、その努力もかれの死後永續せず、やがて女眞族の全

てが、滔々として支那文化の奔流にまきこまれつゝあつたとき、北方から蒙古族が興起して、從來女眞的勢力の基礎をなし、その補給源として在支女眞族に對し、たえず新陳代謝的機能を發揮してゐた滿洲本地と北支那との聯絡を遮斷するに及んで、金國は北京から再び汴京へ遷都したが、すでに國家の生命の根源を斷たれたにも等しく、民族的にもかれらは、支那といふ大きなルツボの中に溶けこむほかない慘じめな最後をとげるに至つた。

つぎに、元も至元四年世祖(フビライ)によつて北京に奠都したが、要するにこれも、その頃元室を惱ましてゐた阿里不哥(アリグブカ)の叛亂に歸因する漠北並に西北邊一帶の動搖⑤や、北支那統治及び南宋征討などの諸の重要問題に對處するには、やはり北京が、もつとも好位置にあることを見拔いたからにほかならぬであらう。その後、元朝は南宋を滅ぼして、金よりも遙かに廣大な支那全土を領有しながらも、末年までこゝに都したが、これも北方本地の重視といふことが、元一代を貫く國策であつたためと考へる。

試みに元朝歷代の皇帝をみると、いづれも卽位までの年月を、北方防衞司令官として外蒙古や西北蒙古方面、すなはち元朝の國家的勢力の根源地をなすところに駐屯してゐるし、或は⑥北京に遷つて支那統治に專念しつゝあつた世祖に對し、その華化的態度を詰問した西北藩王もあるやうに、⑦蒙古本地の諸王貴族たちが、常に元室の華化的傾向に制動機的役割を演じるとゝもに、他面また、支那內地に在る蒙古人貴族も、それ〴〵蒙古本地におの〳〵の地盤を領有してゐて、これらの點に關するかぎり、支那と蒙古とは、かれらにとつては一體的、いなむしろ本土と屬領にも等しい關係にあつたわけである。元朝は北京に國都を置きつゝ、蒙古本地を强力な背後地として、全支那に對する統治力をうらづけてゐたゝめ、支那の土地・人民を統治してゆく上からは、政治的組織やその他を、或程度合目的的に改變したり、新制したりしてはゐるが、しかし、その根底に流れるものは北方第一主義であつた。そして、かゝる態度がまた、元朝をして支那全土を支配すべき歷史的命題を課せられてゐながらも、北京に引きつゞき根據せしめてゐたものと思ふ。

このため元代は、自然江南地區に對する統治力が薄弱化し、元末になると、ほとんど全ての群雄が揚子江の南北より鋒起して、遂にそれらの一人としての朱元璋（明太祖）から北京を逐はれるに至つたが、しかし金朝とは異り、かれらには蒙古本地が確保されてゐたゝめ、支那を放棄した後も、再び勢力をもりかへし、明一代を通ずる北方の大勢力として支那民族を脅威しつゞけ、ひいては清代を經て現在に及んでゐる。

第三に、清朝についてみるに、この朝廷は金朝と同樣滿洲から興起して滿・蒙の北方的諸勢力結合の上に立つて支那を征服し、北京に據つて全支那に君臨したものゝ、滿洲族そのものは極めて少數にして、到底數億を以て計る支那民族を統治し能はざるを知悉してゐたが故に、支那征服の協力者たる蒙古族を、政治上はもちろん精神上においても充分に心服せしめ、滿・蒙兩民族の一心同體的結合關係に立つて支那民族に臨まんとするのが根本的態度であつた。⑧

從つて清朝としても、北方が第一義的であり、清代支那文化および經濟力の重心は、愈々江南に傾いて行つたにも拘らず、北京が依然國都として政治の中心たりえたのは、北方の軍事力によつて代表される滿・蒙勢力に擁護され、これにうらづけられてゐたが故にほかならない。

しかるに乾隆以後、嘉慶・道光と下るにつれて、さきの金と同じく、征服者としての滿洲朝廷は、次第に支那自體に基底を置く支配者に變りゆき、他方かれらの頼みとした滿洲および蒙古の地も、南方よりは支那民族が夥しく植民してくるし、北方よりしてはロシアの勢力が南下侵入することによつて、漸次、清朝に對する國家的民族的勢力の補給源性を失ふに至り、加ふるに南支・中支方面の海上よりする歐洲諸勢力の浸透によつて、その政治的焦點も、やうやく北から南へと移動して行つたのである。換言すれば、北方滿・蒙の地が、清朝にとつて第一義的より二義的へと、その重要性を減じてしまつたといひえられるが、かくなると、清都としての北京の有する價値の喪失は、もはや何人にも明かとなるであらう。

最後に順序は顚倒したが、明朝についていへば、周知の如く、明は金・元・清などゝは異り、支那民族に出自する朱元璋(太祖)によつて創建された朝廷であり、且つ揚子江地帶より發祥した關係上、元室を北京より漠北に奔竄せしめると、今の南京に國都を定めることゝなつた。しかし南京國都時代も、太祖の一代と次の建文帝および成祖永樂帝の中頃までの約五十餘年間にして、永樂十九年には再び北京が京師となり、爾來清末まで引きつゞいたのである。

元來、成祖は靖難の變を起し、建文帝を斃して大統を嗣いだ人であるが、この靖難の變は、一言にしてつくせば、北京を中心とする北方實力派——北方民族といふ意味ではないが——が、南京を中心とする南方派に挑戰して、その勢力を驅逐し去つたともみるべき事件にして、北方派とは元朝の後裔たる蒙古族を防衛すべく、北京(北平)を中心に北邊一帶を固めてゐた武力派であり、これが明初以來の南京派に取つて代つたのである。されば、靖難の變を轉機として明室の重心は、南より北へ置換されたともいひうる。

さらにまた、しば〳〵いはれる如く、明一代を通じ、終始外部より重壓を加へ、これを苦しめてゐたものは、南支沿岸を襲ふ海賊と、北方の蒙古族とであるが、就中、蒙古族の侵寇は屢次に亘り激甚を極めてゐる。事實、明朝の政治的動勢も、經濟上の諸事項も、その何れもが皆北族の防衛と密接なる聯關を有してゐて、この點を考へれば、明室としても代々北方を重視し、成祖以後歷代を通じて、一見危險とも思はれる北京に終始都せざるをえなかつた事情も諒知しうる。たとへば土木の變に際し、天子英宗は蒙古の也先可汗に捕へられ、北京また重圍に陷り、その後もこの地は幾度か危機に曝されてゐるが、かゝる際、もし北京に國都が置かれてゐないか、或は明室が難を江南にでも避けたとすれば、かれらは南宋の轍を踏んで、北支那全土を再び蒙古族の手中に委ね、自らは江南に蹐蹐しなければならなかつたであらう。

かく考へてくると、明代は金・元・清などが北方滿・蒙の地を自己存立の第一義諦と考へ、これを背景的勢力

として支那本土に君臨するといふ建前から北京を國都に擇んだのとは異り、反對に北方民族の侵壓から支那本土を防衛せんがため、政治力の重心を北京に置いたのではあるが、北京が明朝にとつて第一義的である結果、その國都を南京から北京に遷したといふ理由、すなはち北京が國都として有した基本的性格については、やはり同じ意味のことがいへるのではあるまいか。

以上の歴史的事實を通じてみると、北方民族に關するかぎり、かれらが支那本土を領有し、支那民族を本格的に統治せんとするにあたり、著手すべき具體策の一として、いづれも先づその國都を北京に奠めてゐることが判る。

この點に再び思を致してみるならば、最初にも一言した如く、北方民族と支那民族とは民族的には勿論、社會生活上、その他あらゆる點よりみて二元的であるため、北族にして支那の土地・人民を統治するといふことは、この二元性を、かれらの有する强大な武力にうらづけられた政治力によつて締めくゝつてゆくことにほかならなく、その政治力の據りどころ、足だまりとして選ばれたのが北京である。それ故に、この地のもつ國都的性格の中には、それ〴〵本質を異にする北方的なるものと、支那的なものとの複合した相が强く投影されてゐるわけである。

われ〳〵は、北京といへば支那本土に位置し、支那歴朝の國都として、それ以前の都たりし長安・洛陽・開封などゝ全く同じやうに漠然考へがちであるが、上述したやうな觀點よりすれば、北京の國都的性格のうちには、これらとは大いに異るものを具有してゐることを知るであらう。

さらに平たくいへば、北京は特に支那文化の淵藪といふわけでもなく、或は全支那の經濟的中樞をなしてゐたわけでもなく、また國家の中央に位置して交通上の中心をなしてゐたわけでもなく、たゞ國都たる以上、政治力の中心ではあつたものゝ、しかしその政治力も文化・經濟・交通その他のものが凝聚することによつて創りあ

げられた力ではなくして、むしろ強大なる北方の武力——或は明に卽していへば、北族の防衞を重視する上からの武力——にうらづけられ、擁護された政治力によつて、國都の地位を保持しつゞけえたものといへよう。つまり、その國家にとつて北方が政治上第一義的であり、從つて國家の政治的重心が北方に置かれてゐるかぎり、北京は國都たりえたのである。

ところが、さきにもいふやうに、清朝の中期、嘉慶・道光と時代が下るにつれて、滿洲朝廷は次第に、北族的國家から支那自體に根底を置く支配者に移りゆき、さらには南方海上よりする英佛勢力の浸透——具體的には特に道光二十二年の南京條約以後顯著となるが——につれて、清朝に對する滿・蒙の重要性が第二義的となり、それとゝもに實質上、すでに北京は國都としての地位から顚落して行つたのである。それは敢て蔣介石の北伐完成をまつまでもなかつた。かくて民國十七年南京に國民政府が樹立されてからの北京は、一般の人々には、もはや古い都としての歷史的存在でしかないかのやうに思はれてきたが、最近、また〳〵南京に準ずる陪都的重要性を帶びて再び東亞の政治場裡に脚光を浴びるに至つたことは誰しも認めるところである。これを滿洲國の建國、つゞく蒙古聯合自治政府の樹立、またそれらと我が國並に國民政府との不可分的關係において考量するならば、これ以上の說明を要しないであらう。

（附記）本論は以前から私の一課題たる、北方民族と支那民族との歷史的關係を、北京といふ一つの固定的な面に觀點を置いて考へてみた試みであり、從つてこれが問題の全てではないことを斷つておく次第である。

補註① 都市としての北京の歷史は甚だ古く、春秋戰國の時代には、すでに燕都が設けられてゐる。漢以來は引きつづき郡治や州治の所在地となり、ついで唐代には大都督府が設置され、范陽節度使の治所として東北面統御の中心をなしてゐた。

そして五代後晉の天福三年（一五九八年）高祖石敬瑭が、この地を中心とする附近一帶の、いはゆる燕薊十六州を遼國に割讓するや、遼はここを南京幽都府（後には南京析津府）と稱して五京の一に升し、中京經略の基地として指揮經營した。從つて北京が事實上、北支における大都市として發展するに至つたのは遼以後のこととみるべきであらう。

なほ、北京都城遺址の歴史地理學的研究は從來東西の多くの學者によつて試みられてゐることは、すでに那波利貞博士の遼・金南京燕京故城疆域攷（高瀬博士還曆記念支那學論叢所收）中において論及せられてゐる通りであるが、その後も、特にわが國及び中國學者の手になる多くの論著が出てゐる。

奉寛氏、燕京故城考（燕京學報第五期）

朱偰氏、遼・金燕京城郭宮苑圖考（文哲季刊第六卷一號）

周肇祖氏、遼・金京城考（中和月刊第二卷一一號）

小野勝年氏、遼・金都城考（考古學論叢第一四輯）

また、元代における北京、すなはち大都については

朱啓鈐氏、元大都宮苑圖考（中國營造學社彙刊第一卷二期）

同氏、元大都城坊考（同上、第六卷三期）

朱偰氏、元大都宮殿圖考

村田治郎博士、元の大都の都市計畫に就いて（建築學會論文集第九號）

駒井和愛氏、元の上都並に大都の平面に就いて（東亞論叢第三輯）

岩村忍氏、元の大都（蒙古第九卷一號）

などがある。

② 北京は古來、燕京・燕都・幽都などの雅稱を有してゐるが、金以後、國都が置かれると正式な稱呼は、その都度改められてゐる。すなはち金代には、中都大興府（貞元元年）といひ、元代には大都大興府（至元九年）と稱し、明代には洪武元年一度び北平府と改められたが、永樂元年北京順天府に升され、ついで十九年には京師と呼稱さる。清朝は順治元年京師を襲ぎ順天府と稱して清末に至つたが、民國になると、京兆と改められ、民國十七年にはさらに北平と改稱され、現在は三度び變つて北京といふ。

③ これについては、桑原隲藏博士、歴史上より觀たる南北支那（白鳥博士還曆記念東洋史論叢所收）を參照せられよ。

なほ、人文地理學上の見地から江南の文化的開發を論述したものには、岡崎文夫・池田靜夫氏共著の江南文化開發史論がある。

④ 世宗の卽位が、女眞および渤海的勢力に擁護されたものであることについては、外山軍治學士、金世宗卽位事情の一考察（京都帝國大學文學部刊紀元二千六百年記念史學論文集所收）に詳論されてゐる。

⑤ 阿里不哥は世祖の末弟であつて、中統元年（一九二〇年）世祖が上都開平（今のドロン・ノール附近）に卽位すると、同時にこれに對抗して和林に汗位につき、兵を擧げて叛し、爾來至元元年七月來投するまであしかけ五年間兄弟互に相爭つた

ため、漠北一帶が騷亂の巷となり、さらに、阿里不哥に呼應して至元三年（至元三年説は愛宕松男學士、海都の叛いた年次に就て、紀元二千六百年記念史學論文集所收にみえる新説である）には太宗オゴタイ汗家の一統を率ゐて海都（カイドゥ）が西北に叛旗を翻へしてゐる。

⑥　趙翼、二十二史劄記卷二九「元諸帝多由大臣擁立」の條參照。ひとり皇帝のみでなく、歷代の重臣たちも北邊にゐたものが多い。

⑦　元史卷一二五、高智耀傳には

會西北藩王遣使入朝謂。本朝菩俗與漢法異。今留漢地。建都邑城郭。儀文制度遵用漢法。其故何如云云。

とみえる。因みに、これは至元五・六年頃のことと思はれる。

⑧　矢野仁一博士、近代蒙古史研究第十二章以下參照。